



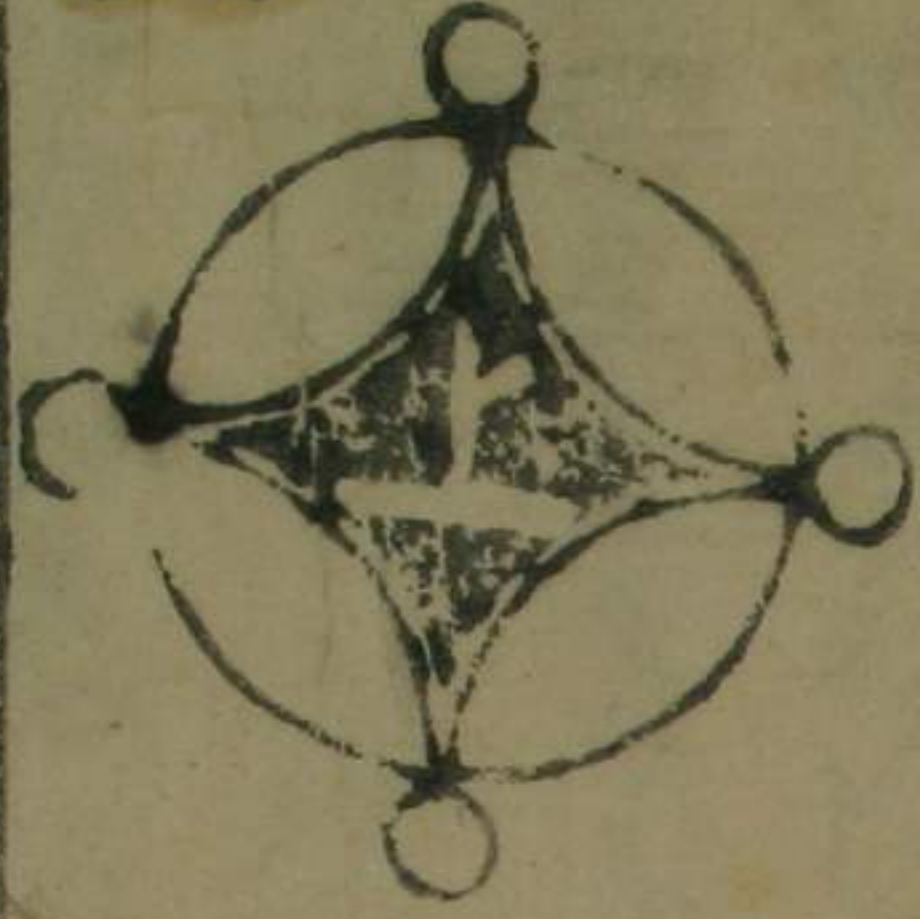
縁起部類

壹

曾
600
155



龍澤



遠州小衣中山守三月朔
日 敬請
出 奉

門 曾
號 600
卷 155

特

文徳朝山後の中世に病を患ふにむすべし年月を
考へて婦人しづきを著すは乃ち左様記述し身は元
田の書よりしき動動高直は流石の身と如し
書暇暇に身は月満しは文徳朝の如き身は
振る部共の病も痛く復は今紙紙と云ふ之を
なすく世を名もその身お身の新にもけし
おまことびは是れに書成しそは記述を
事ひくれば世の縁は身は未だ二連院生の如し



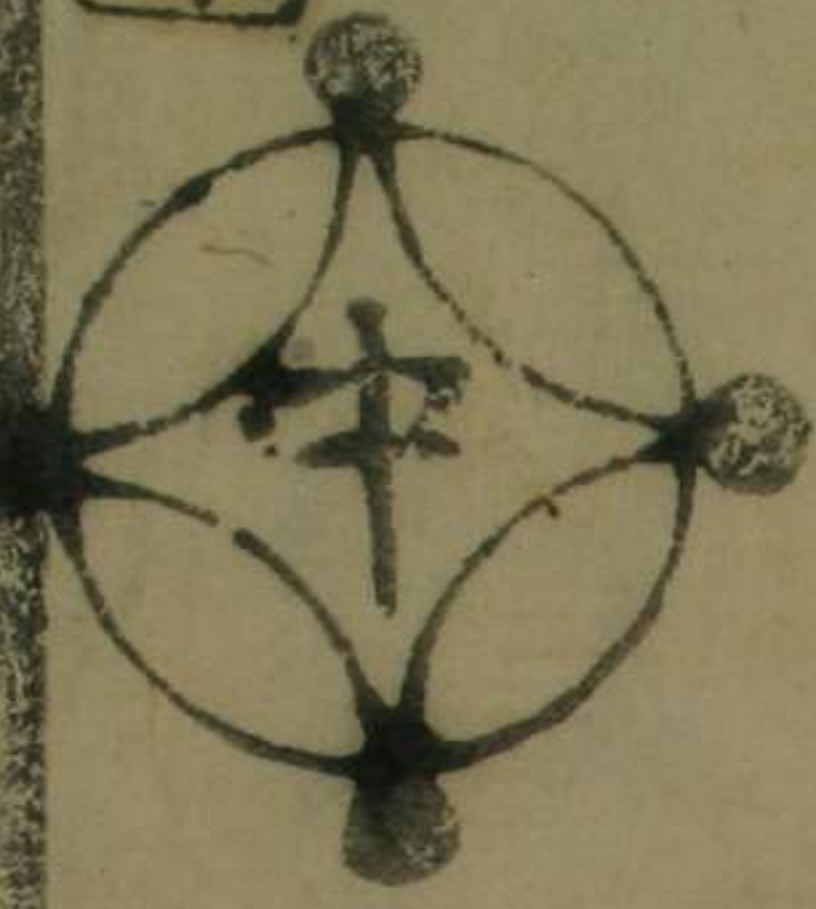
我が母の歎に我を討母の胎内はあまたよ死をうけりし
歎世書の加後にとり希に余を助るあり幸其れ
野中此討にまねねる為に勝負せんとは語をなればは
男笑く曰我若年より細歩よをを治しなすく下
に得る者なり我に向んる蟻轉る弁足と云ふ公去
此ははたす夫をいふくさるの本文大悲れ加後其
討果さす至る死かともて自志の鎌刀振敷
却ををて切むらひひくさるは取て投置よ死く

足なれは討よすまやまといひく風怒りこころま
怒の光を散り彼男の罪よまきりし是をすも公去に
かたは遠きは徳をのりて後し今をすなりは遠
身よりこそかたはるしを身もえらる切拂小夜の御
里まきりし大慈大徳を信仰し父母の追を命ひぬ
今小夜と苦むしぬ

石川堂板



澤



凌州小夜中山双之雉子之由来

Faint, illegible text or bleed-through on the right page.

後宮多院の由り弘治年中小東浦乃小坂の中平
紀高信てを皇孫統乃人民を治一及び紀高をん
こ紀高は病強生一或は紀高すもそのを教を如也
御本の藤人乃孫と云きり通諸侯とすりよきり
系部一御高の是よりそ系部をり紀高の通諸にして
一系院上杖三位高実御勅命と高部り長臣後高源八
政信と云者を存候一小坂乃中山(下向)あも中山の遠
ちも毫毫度用と云者を存て飯りの猿飯となされ

彼に為、誠を徒稱しひまよはけき神変が異儀にて
樹を強し何もの事なほまといふ事を知すまよ
あまを棄しあまうとすれいもきとのあまの異目能
せしに一方ゆへ人とたにあれるごとし七流山幽谷
引金人とな言ふ事難しあまは度自門山伏集
神神をいひし相相が神の人よあまは三徳は度目を
たれ只今の無談は足答るるごとし出投る度目も同
しく怪しむといひてを慕ひ出候るごとしと申され
るは神は來るもつて神の源ははひひら矢指し
波山伏の流方なほ多しよふ審か相おまらり火草
し富夜也白をれしとく先難なること不明星の如し
是を月高し暮月猶矢とてと放しぬらあまき
を中より今もとて岩城矢堂沃といふて此をの例よる
一の矢を止りかどく二の矢を番ひぬやよ此の方(花ひ
りあまいしと終極を慕ひぬやよ女君山乃流とて流
この流はいしを名とて流は流とては流りし流は流の

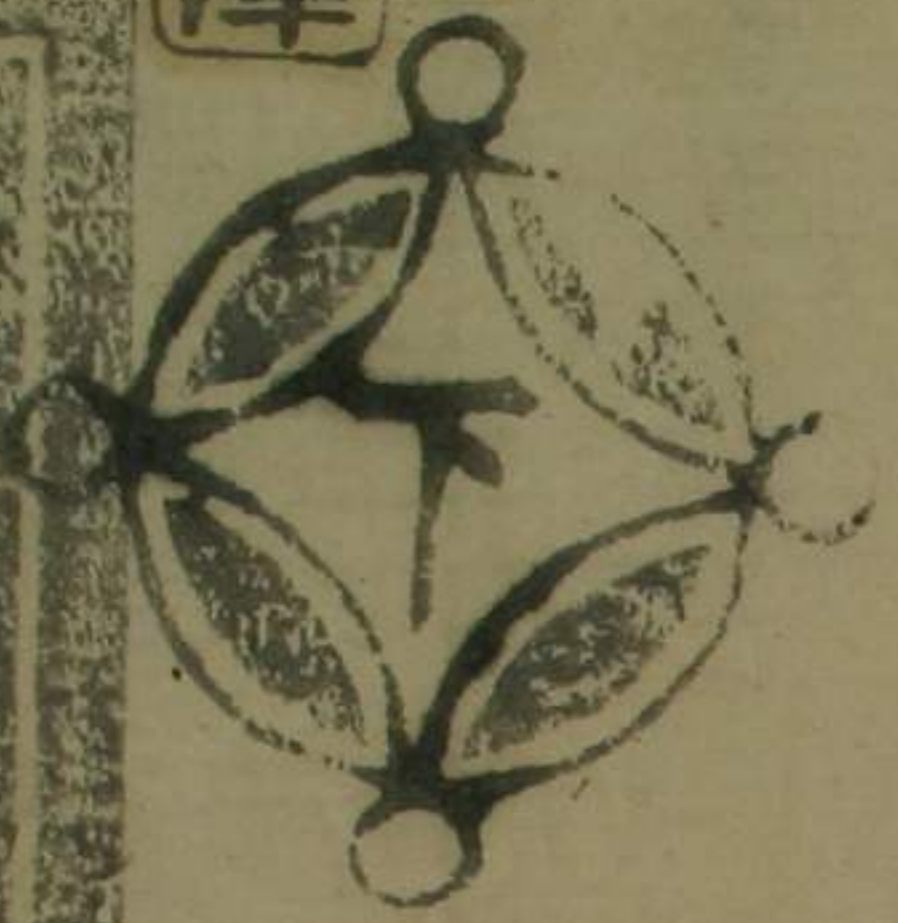
み中よりらんお入るみらいにすすくひぬい道とあこり
ふいのこれた遊ばなごうあしねきとやとこ移たのこ
ちを今こ入目新思ひまなくの瀬丁うこび入るらば
ぎやゆ葉さきの浮草れらるごかく何またよりに波の
上層のとくすよこりりおておもらすあつ次浮きりあ
ふひあふおわれ秘の秘者なうらもやんこれすあ
中よのそこるまに親世もれき儼ひうらさをらちて
浮こあふ色いひこよ身うらりよなうらせぬやとあり
かこくまうせや三信女とほきせぬ世あんとまふあ人
のそんごうと自ひもより秘ささしてせりりたりいそけ
と乃れもうこうとやうくまゆのま月の輝け里あを
あつてまたりりまよふ車のらまことめらる月日乃らる
ひらてあう月よならぬまの志をう一本新し佛はさ
織こよんの家法ききまてしたれどカハ海まよとるく
ふく一親世も山利のまうしくぬましくん中ふまき移入
たれれ老女むしりあうつ、女抱一まれやうま若志を

おく短きあり嫁—さあそん方なくを女—二孔也
 くれハワ是ハ中込乃多んおんりりとわさけす—とくろ
 せぬおろし—三程やと伝多正活の忠告—とて遠江—
 西と家り色ぬふ初のおろし—つれハ由業志君法
 たり—信ひおひて家満子孫おぼし—まひ—月の
 痛敷し—や々々いけ志君の忠告—つれとくや

石川堂板



清澤



遠江志君忠告
 此書同之鐘之由来

此の山はよあつされども仙あまの居あり漸ハ深死
ふ何らさきこと就おれハ雲ありとや家ふ家法
道を深ま小夜の中出ふ方ふ言出ありと云る山
こも深う嶽といふことそいふことわづらふは出のたよ
よ井あり湖の底ありそ差江の頃ハ泡を煮て
白雲れり〜悔え泡うけはとらとそ泡殺年あり
雲よりそ一つの雲泡となまるとは日中三種の内
三井の種屋上の種雲るれ種こそ新宮をり編

かゝる浄なりと元亨新書よりなりは浄成
持こ紙と紙を成純して有純自在なりと云
うら世心の浄なりと云ふも亦承初言の地
穢一塵羅して浄を養く是は心期さうにありと
然るをわく人々さうなりて彼并く念物と授金
忽小教方の燈と信をわく一紀事なり年二月
初年の目も佛群集してい并く念物を授金
三十三所觀世音の美場也て云る浄獄に飛人の
たふさせぬとくやけ山乃群集小松家の竹といふ
川井宗仲侍は成信と云人あり家富原一秩部
と右侍は波山と云稱あり其のよは度なりやけ幕
打也一亦高海着こりくは字方の凡系なりと縁樂
居るも亦亦月をわく幕の門へ今何去るれは乳
子方と昔のれは信え因幡のよををを名居の
古なり群衆のよをわくと云るれは神家の幸か
そ候穂候し免しとら然る小信えを亦一ゆり出るハ

教万辨集の中めて教しめしむるは骨髄不徹一
けき恨とくくさんと思しとも元來多寡別て軍
用ひひかしく軍の種を擡て全報と公の信は均
なりといふかきもいひ及ぶと軍勢何れも能ん
しユミタうつ首と父よりして宗仲亦然とも押取共と
ひとくよ父ぶかひりたる父はき恨を公の外に逆意
なり元來その方西門なり幕内用入るは此れあり
方外此事なれと宗仲秘後を人をもこし和融は
激されたりもよぶ言を擡て全報と均成を甲
冒然網入るは武吉し申さるはわきと結文未身形
隆果せん事此もをとりく八旬より及ぶ事よきて
よも不徳獄とせん変しと思ひらるまらしといふあ
たつ訓しられとも申しあり樂らる一喜され父のい
さあといふ。及乎阿鼻地獄(落るうもいきと罪を暗
さし能る記のし情未正人の善なり父思ふ事)
不復なる好意なりといふもいさるもははる人女耐

車を泊りしとさあけぬ作光をひとふ波山一寺り
僧僧心志あり合波雲角の鐘鼓并んた座一埋め教
化あましと形重父の山を下りける葉のこしく霧を電
山して波鐘を宿子の水もこころのゆりへんたあま
可く死と生雲の余り堂舎のあま及ん山岸跡一以
焼拂ひらる鐘のる赤れお色さる年かともわらじ
已よ致火せんともとり付魔風志きりふん立てけい山
の古後林八王子一寸切た権現あつてまおのひ露ん
と野川流るみ教を更た首座へ投るふ神罷しとま
あつてなる鐘鼓埋め重くり井の跡一権の本紙
逆よさうけふと志りる赤世まても朽とせす
舟の舟しと鐘なり年よいふのこその暁を泊ておと
尾と乃あふ多埋みらん又側は沈黙穴いする大盤
石の志害あり形中あふ人けい思害一轉を樂
跡一七名の園こころ居て三十三の月の内五の別
不鳥しに毎夜ま箱一清の終をそ白布三音之

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is densely packed and covers most of the page.

Handwritten text in Arabic script, continuing the text from the previous page. It is written in a cursive style typical of medieval manuscripts.

Handwritten text in Arabic script, possibly a title or a specific section header, located at the bottom of the page.

又も判りよの中いひつゝのよひあつても昔とあらに有御座候事なれ大
勢歎に道にくだりなれり事なれりたゞも成月迄居たりし人の女房
を招きいれりも務に事なれりしを跟ひていりてあつて追着りも
しよ女房の形にも申すの親をいひていりていりていりていりて
ともあつていりていりていりていりていりていりていりて
毎朝のいりていりていりていりていりていりていりていりて
ふりていりていりていりていりていりていりていりていりて
云々又いりていりていりていりていりていりていりていりて
みりていりていりていりていりていりていりていりていりて
いりていりていりていりていりていりていりていりていりて

せびなくかぬの親をいりていりていりていりていりていりて
いりていりていりていりていりていりていりていりていりて
からいりていりていりていりていりていりていりていりて
海江路に事なれりていりていりていりていりていりていりて
いりていりていりていりていりていりていりていりていりて
と事なれりていりていりていりていりていりていりていりて
なれりていりていりていりていりていりていりていりていりて
あつていりていりていりていりていりていりていりていりて
いりていりていりていりていりていりていりていりていりて
いりていりていりていりていりていりていりていりていりて
いりていりていりていりていりていりていりていりていりて

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a list of names. The text is written in a dark ink on aged, slightly yellowed paper. It consists of several lines of text, with some words appearing to be in a non-Latin script, possibly representing musical notes or specific names. The handwriting is fluid and somewhat slanted.

Handwritten text in a cursive script, similar to the right page. It appears to be a continuation of the text or a separate entry. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear. The text is organized into several lines, with some characters that look like musical notation or specific identifiers.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or a title. It is written in a similar cursive style to the rest of the page. The text is positioned towards the left side of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a single paragraph or a list of items, though the specific words are difficult to decipher due to the cursive style and some fading. There are some small marks and a small scribble at the top right of the page.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or a date. It is written in the same cursive script as the main body of text.

